

子どもの不登校に伴う母親の変化のプロセスおよび その支援方法の検討

○中山和香 (東京学芸大学大学院)
江刺逸生 (東京学芸大学大学院)

稲野 友 (東京学芸大学大学院)
工藤浩二 (東京学芸大学)

キーワード：不登校，母親支援，プロセス研究

目 的

わが子が不登校状態になったときに，その母親はその状況についてどのように認知し，どのような態度，行動をとるのか，そして，それはどのように変化していくのか，その一連のプロセスを明らかにし，その結果を踏まえて母親支援について検討することを目的とした。

方 法

不登校経験のある子どもの母親 9 名を対象に，半構造化面接を実施した。調査時期は，平成 27 年 8 月～9 月であった。

なお，本調査は，東京学芸大学の研究倫理委員会で行った実施についての承認（受付番号 148）を得たうえで行われた。

結果・考察

M-GTA(木下, 2007)を援用し，分析を行った。その結果，母親の変化のプロセスに関する 28 の概念と 8 のカテゴリが生成された (Table1)。生成されたカテゴリから，子どもの不登校経験に伴う母親の変化のプロセスが示された。

子どもの不登校経験に伴う母親の変化は，次のようなプロセスを辿る。子どもが不登校状態になった母親は，まず，【苦悩・混乱】する。その後，子どもとの間で【衝突】が生じる。この【衝突】は，初期の段階から見られ，【苦悩・混乱】の時期との間を行き来する。【苦悩・混乱】と【衝突】を繰り返し，子どもの“受容”へと進む。この“受容”は，子どもが学校に行かないことを受け入れる【受容（前期）】と，子どもの気持ちが何よりも大切に思うようになる【受容（後期）】の 2 段階に分かれる。“受容”が可能になったことで，母親の中に“変化”が生じる。この“変化”も【変化（前期）】と【変化（後期）】の 2 段階に分かれ，それぞれ内面・行動面での変化が見られる。これらの流れを経て，母親自身の【自己内省】が行われる。子どもが不登校状態から脱した後も，母親は，【不登校経験後の不安】を感じている。

今回示されたプロセスの中で，【苦悩・混乱】や【衝突】を経て，【受容（前期）】に移行する段階が，母親の気持ちの変化における最も大きな転換点である。

本調査では，先行研究(小野, 1993; 板橋, 2000)

で明らかになっている段階に加え，子どもが不登校状態から脱した後も母親の不安は継続するということが示された。子どもが不登校状態から脱した後も，母親は，“また不登校になってしまうのではないか”という不安を抱き続けるのではと考えられる。

また，語りから，母親は，自分の気持ちを聞いてもらえる場所や，同様に子どもが不登校になった経験を持つ母親と話したいと考えていることが示された。支援者が，同じ境遇にある母親同士を結びつける橋渡しの役割を担うことの重要性が，当事者の語りからも再確認された。同じ境遇にある母親と想いを共有することで，変化が促され，次の段階へと移行しやすくなることが推測される。

Table1 カテゴリ・概念一覧

カテゴリ	概念
苦悩・混乱	「なんでうちの子が？」と思う
	先の見通しが持たなくて不安に感じる
	周囲の目が気になる
	子どもの進路が心配になる
	どうして行けないのかわからない
	どうしたらいいのかわからない
	学校に行ってほしいと思う
	母親が非難される
	学校は行くものだと思う
	子どもが学校に行かないことに対する最初の辛い感情
衝突	無理やり学校に行かせようとする
受容(前期)	行かないことを受け入れた上でこれからどうするか考え始める
	行かないことを受け入れた上で子どもの気持ちを理解しようとし始める
受容(後期)	行かないことよりも子どもの気持ちの方が心配になる
	学校に行くことよりも子どもが元気でいてくれることの方が大切に思えてくる
変化(前期)	「うちの子だけじゃなかったんだ」と気づく
	先のことが想像できるように楽になっていく
	学校に行く行かない以外の子どもの変化がうれしく思える
	不登校に対する新たな見方を獲得する
変化(後期)	周囲の非難や世間体が気にならなくなる
	子どもを尊重して接するようになる
自己内省	自分自身の時間も大切にできるようになる
	子どもの不登校が自己内省のきっかけとなる
不登校経験後の不安	いつまた不登校になるか不安になる
	今後母親として不安は尽きない
	合格後は通えるかどうか不安になる
	子どもの再登校がゴールではない
	子どもの再登校に伴う不安を感じる